

主題「よりよい人間関係を築くために表現方法や表現内容を試行錯誤し続ける生徒」の育成

1 主題設定の理由

2030年に向けたメガ・トレンドの1つとして移民の増加が挙げられ、他の言語を話す人や異なるバックグラウンドをもつ人が、自分の住む地域や国で増加することが考えられる。そんな中、AIの発達や自動翻訳機能の進化などにより、外国語の知識やスキル不足は補える領域になることが予想される。しかし、実際の社会の中で、異なるバックグラウンドをもつ人々とよりよい人間関係を築いていけるように、相手意識をもって自分の考えや情報を伝えながらコミュニケーションを行うことは、ウェルビーイングな社会の実現において求められる力であり、英語科でこそ伸ばしていける力であると考えられる。

はばたく群馬の指導プランII(2019)では、「教材や教科書の題材に関連した具体的な課題を設定し、その課題解決に向け、目的・場面・状況等のある外国語の言語活動に繰り返し取り組む中で、言語材料を実際のコミュニケーションにおいて活用できる力や情報を整理し表現する力を身につけていくことが大切」とされている。また、山本(2019)は、PBL(Project Based Learning)を取り入れることで、「リアルな社会で自律してハッピーに生きていく自律型学習者」が育成されると述べている。これらのことから、単元の学習の目標(あるテーマについてのスピーチ、ビデオレター作成等のプロジェクト)を達成するために、自分の課題を設定し、表現方法や表現内容を試行錯誤しながら言語活動に取り組みが、よりよい人間関係を築くためのコミュニケーション能力を育成することが大切だと考えられる。

異なるバックグラウンドをもつ相手に考えや情報を伝えると、想定とは違う反応があったり、意図が伝わらなかったりすることがある。その際、どうしたら相手に思いや情報が伝わるかを予測し、実際にコミュニケーションを行い、表現方法や表現内容の適切さを振り返り、粘り強く言語活動に挑戦しようとエージェンシーを発揮し、よりよい人間関係を築くためにコミュニケーションを図ることが求められる。答えのない言語活動において、生徒がエージェンシーを発揮し、自らAARサイクルを回すことができるようにするための手立てを講じることで、英語科における探究的な学びが実現すると考えた。

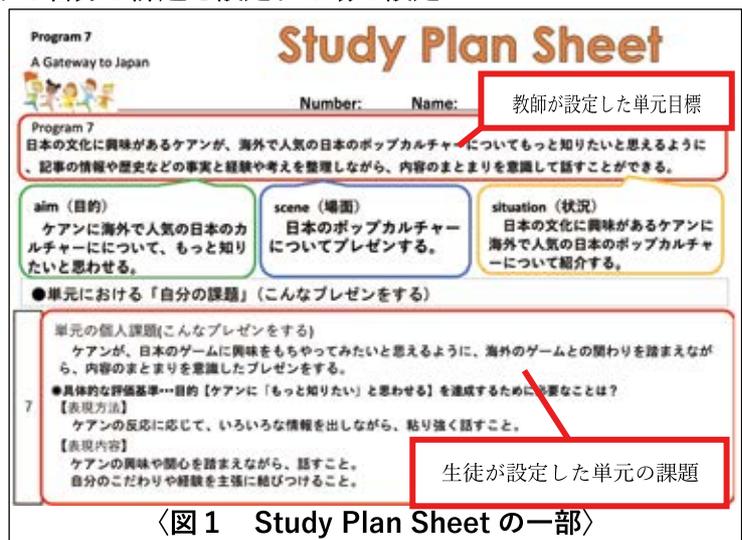
以上のことから、今年度は、探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して、「よりよい人間関係を築くために表現方法や表現内容を試行錯誤し続ける生徒」の育成を目指して研究を進める。

2 探究的な学びを実現するための具体的な手立て

(1) 「Study Plan Sheet」を用いた単元における自分の課題を設定する場の設定

生徒は、教師が設定した単元目標のコミュニケーションを行う目的や場面、状況等を踏まえながら、「Study Plan Sheet(図1)」を用いて単元における自分の課題を設定する。課題は一人一人異なり、相手をもつバックグラウンドから、どのように自分の思いや情報を表現し伝えたらよいかや、どのように目標を達成していきたいか、という考えや思いによって設定される。授業では、自分の課題の解決に向けて、表現方法や表現内容を試行錯誤しながら言語活動に取り組む。

また、授業での自身の表現方法と表現内容の適切さや妥当性について振り返りながら、次の学習に生かしていく。生徒は、タブレット端末上に蓄積した既習単元の「Study Plan Sheet」を活用し、設定した自分の課題の適切さについて振り返る。よりよい人間関係を築くために課題を設定し、エージェンシーを発揮しながらAARサイクルを回していくことによって、単元を追うごとに、より適切な自分の課題を設定できるようになり、探究的な学びを実現することができる。と考える。



〈図1 Study Plan Sheetの一部〉

(2) 「新附中 Can-Do シート」を活用したフィードバック

「新附中 Can-Do シート(図2)」は、生徒が単元の最初に作成する、単元目標の到達度合いを記述した評価基準表である。作成する際、一人一人が達成したい姿をワークシートに記入した後、学級全体で単元を通して達成したい姿について話し合い、評価基準を作成する。評価基準は、3観点全てではなく、思考・判断・表現のみとする。これは、単元目標のコミュニケーションを行う目的や場面、状況等は思考・判断・表現に含まれるからである。また、自分の考えや情報等を相手にわかりやすく伝えようと、自分の表現方法や表現内容を試行錯誤し続けることが、エージェンシーを発揮している姿の一つと考えるからである。評価基準は、AからCの段階で設定して表にまとめる。その際、「表現方法」と「表現内容」についての評価基準を設定する。生徒は、この評価基準を基に、自分の表現を自ら振り返ったり、

友達の表現について、フィードバックを行ったりする。この学習の積み重ねによって、相手のバックグラウンドに応じてどう伝えたらよいかを予測して表現し、その表現方法や表現内容が適切であったかを振り返ろうと、エージェンシーを発揮してAARサイクルを回し続けることができるようにする。

<p>日本の文化に興味があるケアンが、海外で人気の日本のポップカルチャーについてもっと知りたいと思えるように、ケアンの興味関心を踏まえながら事実と意見を結びつけ、二語伝えたい内容を明確にしながら内容のまとまりを意識して話すことができる。</p> <p>A 【表現方法】 ・主観的な態度（熱意、ジェスチャーや表情を使い、明るく）で話し、ケアンをリードしている。 ・相手の反応に応じて、粘り強く話す内容を変えたり工夫したりしている。</p> <p>【表現内容】 ・自分が一番伝えたい要点を明確にしている。 ・内容に自分の経験や考え（思い）、こだわりを結びつけながら話している。 ・ケアンの興味や関心を踏まえながら話している。</p>	<p>〈図2 新附中 Can-Do シート〉</p>
<p>日本の文化に興味があるケアンが、海外で人気の日本のポップカルチャーについてもっと知りたいと思えるように、記事の情報や歴史などの事実と経験や考えを整理しながら、内容のまとまりを意識して話すことができる。</p> <p>B 【表現方法】 ・資料（写真、映像、実物）を使いながら、話している。 ・話し手から質問を投げかけながら話している。</p> <p>【表現内容】 ・内容のまとまりを意識しながら話している。 ①so や because 等の接続詞を適切に用いて、音楽が好きな理由を明確に示している ②文と文を適切な順番でつなげている ③内容と内容を適切につなげている</p>	
<p>日本の文化に興味があるケアンが、海外で人気の日本のポップカルチャーについてもっと知りたいと思えるように、記事の情報や歴史などの事実と経験や考えを整理しながら、内容のまとまりを意識して話すことができる。</p> <p>C 【表現方法】 ・一方的に話している。</p> <p>【表現内容】 ・日本のポップカルチャーについて、内容が似る程度に話している。</p>	

3 授業実践例

(1) 単元 PROGRAM 7 A Gateway to Japan

(2) 実施時期／学年／配当時間 令和6年2月／第2学年／全7時間

(3) 単元の目標

日本の文化に興味のある ALT の先生が、海外で人気の日本のポップカルチャーについてもっと知りたいと思えるように、記事の情報や歴史などの事実と経験や考えを整理しながら、内容のまとまりを意識して話すことができる。

(4) 実践の概要

第1時では、ALT が、出身国のジャマイカを代表する文化の1つであるレゲエ音楽を紹介し、生徒に、「日本のポップカルチャーに興味があるので、私に紹介してほしい」と伝えながら、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等が含まれた単元目標を設定した。生徒は、単元目標を基に、Program 1～6の学習で設定した課題を参考にして、どうしたらより適切な課題になるか、表現方法や表現内容をどう工夫したらよいかを考え、自分の課題を設定した(図3)。「Study Plan Sheet」を用いて、自分の課題を設定することで、単元目標を達成するための見通しや課題を解決しようとする意欲をもちながら授業に取り組むことができた。

また、一人一人が「ALTの先生が興味をもてるように話し方を工夫したい」「ALTの先生の興味に合わせて、伝える情報や内容を吟味し、もっと知りたいと思わせるように話したい」という思いをもちながら、自分の考えや情報を相手に伝えようと粘り強く言語活動に取り組むことができた。

第6時では、生徒は、「新附中 Can-Do シート」上の記述を確認しながら、お互いのプレゼンテーションを観察し、「表現方法」と「表現内容」についてフィードバックを行った(図4)。言語活動を行う中で、ALTは、生徒の提案内容についてすでに知っており、「日本のゲームについてもっと知りたいか」と尋ねられても「もう知っている」「その内容にはあまり興味もてない」と返答することが多くあった。そこで、図4下線部のようなシート上の記述を確認しながら、フィードバックを行ったり生徒や教師の紹介例をモデルとして示したりすることで、「ALTの先生が自分が紹介する話題にどの程度興味をもっているか、ジャマイカでどの程度人気なのか等に応じて、情報を出す順番を変えよう」や「自分の考えを主張に結びつけながら話そう」とする姿が見られた。その後の言語活動では、コミュニケーションに支障をきたしても、簡単に諦めずに、ALTとよりよい人間関係を築こうと表現方法や表現内容を試行錯誤し続けることができた(図5)。生徒がエージェンシーを発揮し、自らAARサイクルを回すことができた。と考える。

●単元における「自分の課題」(こんなプレゼンをする)	
生徒①の課題	<p>単元の個人課題(こんなプレゼンをする)</p> <p>ケアンが、日本のゲームに興味をもちやってみたくてみたいと思えるように、海外のゲームとの関わりを踏まえながら、内容のまとまりを意識したプレゼンをする。</p> <p>●具体的な評価基準…目的【ケアンに「もっと知りたい」と思わせる】を達成するために必要なことは?</p> <p>【表現方法】 ケアンの反応に応じて、いろいろな情報を出しながら、粘り強く話すこと。</p> <p>【表現内容】 ケアンの興味や関心を踏まえながら、話すこと。 自分のこだわりや経験を主張に結びつけること。</p>
	<p>単元の個人課題(こんなプレゼンをする)</p> <p>日本のドラマの魅力や魅力を伝え、ALTの先生に見てみたいと思わせられるように、伝え方や内容構成を工夫しながら、思いが伝わるプレゼンをする。</p> <p>●具体的な評価基準…目的【ケアンに「もっと知りたい」と思わせる】を達成するために必要なことは?</p> <p>【表現方法】 ケアンがそのドラマを知っているのか等の情報を基に、情報を選びながら紹介する。</p> <p>【表現内容】 ケアンが興味を持てるように、ケアンが好きなジャンルに合わせたり、そのドラマと海外のドラマとの関係性を伝えたりする。</p>

〈図3 第1時に設定した課題〉

<p>A 【表現方法】 ・主観的な態度（熱意、ジェスチャーや表情を使い、明るく）で話し、ケアンをリードしている。 ・相手の反応に応じて、粘り強く話す内容を変えたり工夫したりしている。</p> <p>【表現内容】 ・自分が一番伝えたい要点を明確にしている。 ・内容に自分の経験や考え（思い）、こだわりを結びつけながら話している。 ・ケアンの興味や関心を踏まえながら話している。</p>	<p>〈図4 「新附中 Can-Do シート」上の記述〉</p>
<p>B 【表現方法】 ・資料（写真、映像、実物）を使いながら、話している。 ・話し手から質問を投げかけながら話している。</p> <p>【表現内容】 ・内容のまとまりを意識しながら話している。 ①so や because 等の接続詞を適切に用いて、音楽が好きな理由を明確に示している ②文と文を適切な順番でつなげている ③内容と内容を適切につなげている</p>	

〈図4 「新附中 Can-Do シート」上の記述〉

S: Have you played Pokemon before?
A: Yes, I have. I love RPG like Pokemon.
S: In the game, a trainer throws a ball and catch Pokemon.
A: I know.
S: There are many kinds of monsters in the game.

S: Have you played Pokemon before?
A: Yes, I have. I love RPG like Pokemon.
S: You mean you like RPG which we can correct characters and make them grow up?
A: Yes!
S: I see! So I recommend ~. It must be great for you!

※AはALT、Sは生徒

〈図5 表現方法と表現内容のフィードバック後の変化〉

簡単に諦めずに、ALTとよりよい人間関係を築こうと表現方法や表現内容を試行錯誤し続けることができた(図5)。生徒がエージェンシーを発揮し、自らAARサイクルを回すことができた。と考える。

単元の学習の終末には、「Study Plan Sheet」に設定した課題を解決することができたか、単元目標を達成するために、自分の課題が適切であったかについて振り返りを行った。さらに、Program 7 以前に作成した「Study Plan Sheet」上の記述を参考に、自分の課題が適切であるかどうかを見つめ直し、よりコミュニケーションを行う目的や場面、状況等に即したものになるように自分の課題を修正する生徒が多くみられた（図6）。

生徒②の課題
生徒②が修正した部分

単元の個人課題(こんなプレゼンをする)

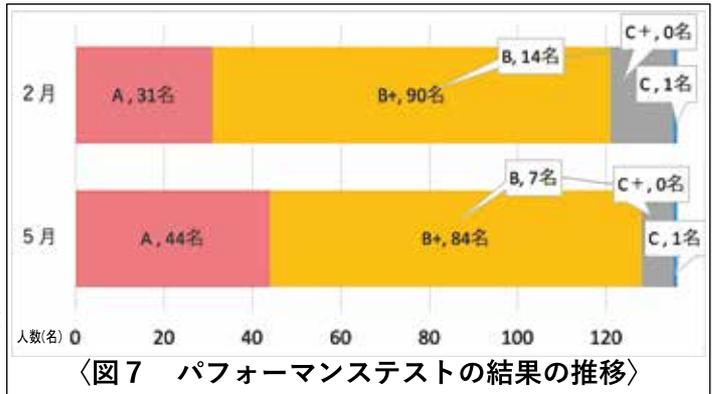
日本のドラマの魅力を伝え、ALTの先生に見てみたいと思わせられるように、ジャマイカのドラマと日本のドラマを比べたり日本のドラマの特徴等を伝えたりしながら、思いが伝わるプレゼンをする。

〈図6 単元の終末に修正された生徒②の課題〉

4 研究の成果と課題

成果として、令和5年度2月と令和6年度5月に話すこと（発表）におけるパフォーマンステスト（5段階評価）を同一の生徒集団を対象に行い、符号付順位と検定を行った結果、思考・判断・表現において、より高い得点を取ることができた生徒が増加した（ $P < .001$ 、図7）。

「Study Plan Sheet」を用いて自分の課題設定を継続的に行うことで、自らの課題を解決しようとエージェンシーを発揮し、AARサイクルを回しながら言語活動に取り組むことで、資質・能力の向上につながったと考える。また、「新附中Can-Doシート」を活用したフィードバックを通して、相手のバックグラウンドに応じて伝え方を予測し、予測を基により思いや情報が伝わるように表現方法や表現内容を試行錯誤し続けてきたことも資質・能力の向上に寄与したと考える（図8）。以上のことからよりよい人間関係を築くために表現方法や表現内容を試行錯誤し続ける生徒の育成につながったと考える。



〈図7 パフォーマンステストの結果の推移〉

課題として、より多様なバックグラウンドをもつ他者や状況をつかめていない他者とコミュニケーションを行う際に、エージェンシーを発揮し、よりよい人間関係を築こうと表現方法や表現内容を試行錯誤することが難しい生徒がいることが挙げられる。パフォーマンステストの結果や生徒の発話内容等の変化から、手立が表現方法や表現内容を試行錯誤するために有効であると考えられる。しかし、相手が初めて出会う人、または出会って間もない他者であった際、状況をつかみきれず自分の思いや考えをうまく伝えられないなど、多様なバックグラウンドをもつ他者への適切な表現方法や表現内容を調整することは容易ではない様子が見られた。そのため、様々な目的や場面、状況等の中で、思いや情報の適切な伝え方を予測し、実際にコミュニケーションを行い、表現方法や表現内容を振り返る AAR サイクルを回せるようになることが大切であると考えられる。

日本食に興味があるALTが食べてみたいと思えるように、日本食を紹介する活動

<p>S: I'll introduce <i>nama yatsushashi</i>. Have you eaten it before?</p> <p>A: Yes, I have. My friend gave it to me as a gift. It was so delicious.</p> <p>S: Yes! It's a traditional Kyoto food. It's soft and chewy, more like rice cake.</p> <p>A: I like the texture and the taste of it.</p> <p>S: Really? It usually flavored with cinnamon.</p> <p>A: That's right. So I like it very much.</p>	<p>S: I'll introduce <i>nama yatsushashi</i>. Have you eaten it before?</p> <p>A: Yes, I have. My friend gave it to me as a gift. It was so delicious.</p> <p>S: Really? Do you know it has many kinds?</p> <p>A: Yes, I've eaten matcha, chocolate and sesame.</p> <p>S: They are delicious too. And there is an unique <i>yatsushashi</i>. Look! This is a Japanese spice <i>yatsushashi</i>. It's spicy, but delicious.</p> <p>A: Interesting! I want to try it.</p>
---	---

※AはALT、Sは生徒

〈図8 別の単元におけるフィードバック後の変化〉

5 今後の展望

今後は、今年度の研究を継続していくとともに、さらに多様なバックグラウンドをもつ他者とよりよい人間関係を築く必要性を感じながら、継続的にエージェンシーを発揮し、表現方法や表現内容を試行錯誤する言語活動に取り組むことができるようにしていきたい。そのために、課題や評価基準の適切さについて生徒自身が振り返り、より質の高いフィードバックを行えるようにしていきたい。また、ALTや教室で共に学ぶ仲間に加え、海外在住の学生とオンラインで交流したり ALT の先生以外の海外出身の講師に向けて思いや情報を伝える活動を設定したりするなど、多様なバックグラウンドをもつ人々との交流の機会を拡大することで、様々なバックグラウンドをもつ他者とよりよい人間関係を築くことができるようにしていきたい。

＜参考文献＞

- 群馬県教育委員会 (2019) 『はばたく群馬の指導プランII』
- 白井 俊 (2020) 『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』 ミネルヴァ書房
- 文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 学校図書
- 山本 崇雄 (2019) 『「教えない授業」の始め方』 株式会社アルク